

11 瞑想でたどる仏教 —日本の古代編—

【全4回】／開催方法：現地

みのわけんりょう
蓑輪 顕量

東京大学大学院教授
(人文社会系研究科・
インド文学インド哲学
仏教学 専門分野)



受講料 会員料金：¥9,000 早割価格：¥8,000 (納入期限：8月1日)

【日程・時間】【全4回】 8月6日(土) 13:30~15:00・15:20~16:50
8月7日(日) 10:30~12:00・13:30~15:00

■受講に必要なもの
[テキスト] レジューメ配布

仏教の伝えた瞑想は身心の観察をその内実とする。それは私たちの日常に経験する悩み苦しみを超える道であったと位置づけられる。具体的には、観察の対象になるものに「注意を振り向けしっかりと把握する」ことであった。この原則を保ちつつも、瑜伽行派が登場すると、若干、異なったニュアンスが、修行道の中に入ったように思われる。

やがて、仏教の修行実践は東アジア世界に伝わり、最終的に日本にも伝わった。日本古代の仏教界において、修行はどのように受け止められ、実践されていったのであろうか。残念ながら、このような視点に答えてくれる資料は限定されており、あまり多くはない。しかし、少ないなりに、ある程度の流れとその実際を推測することができる。

この講義では、瞑想に焦点を当て、日本古代の飛鳥時代から平安時代にかけての修行実践について、考察を試みる予定である。

- 第一回 飛鳥時代の修行実践—道昭を中心に
- 第二回 奈良朝期の法相宗の実践—一行基と道鏡の場合
- 第三回 平安初期の法相宗の実践—徳一の場合
- 第四回 平安初期の天台宗の実践—最澄の場合

【参考書】

『仏典とマインドフルネス』 著者：蓑輪 顕量 編 出版社：臨川書店 出版年：2021
(本書は仏教の修行道を現在の科学と関連づけて探ろうとする試みです。)